

福祉系 対人援助職養成の 現場から¹⁹

西川 友理

格差社会を感じる日々

「どうして本番も近いのに、みんな放課後残って準備してくれないの?!」

イベント実行委員長である A さんは、怒っています。イベントのリハーサルをしようにも、皆の都合がつく日がないのです。

「だって、アルバイトの予定が入ってるし…」

「うーん、お金ないねんやったら、今月だけ親に借りたら？来月返したらええやん」

「いや、あの…むしろこっちが親にお金を貸してるねん。せやから、今月カツカツやねん」

A さんはびっくり。親にお金貸すなどという概念がなかったようです。なんと言い返したらいいかわからず、その場はむにゃむにゃと黙ってしまった A さん。相手も、なんだか黙ってしまったとのことでした。

A さんは私に言います。

「…そんなに生活がしんどいなら、行事の実行委員会とか、部活とかに参加しなけりゃいいのに。きちんと参加してるこ

っちが迷惑や。」

「うーん。迷惑かあ…。なんでそんなにアルバイトで忙しいのに、実行委員会に入ってるやろかねえ。」

「…いや、あの、迷惑っていうか…事情はあるのは、わかるんやけど…。」

しばらくのち、Aさんは、

「…事情はあっても、実行委員会をやりたかった、っていう何かがあんねんな…。」

とつぶやいていました。

「ねえAさん。委員会メンバーそれぞれに事情はあるんだからさ、ああじゃないか、こうじゃないかと考えるだけじゃなくて、ちゃんと話し合ってみたら？」

大学生のB君のアルバイト収入は、B君の家族にとって大事な生活費になっています。

「ボランティア？そんなん、行ってられへん。というか、ボランティアに行くっていう想像もつかない。僕、アルバイトありますし…。」

B君が就職を希望する施設でのボランティアの募集にも、応募しません。

「ボランティアに行っておいた方が就職には有利やろうけど、今月の実入りが減ったら生活していかれへんし…とりあえずは今の生活の維持が大事やわ」

Cさんが、家庭環境が不安定な世帯が多い地域の学童保育(放課後児童健全育成事業)へ、ボランティアに行った経験を話してくれました。

「…衝撃でした。」

「何があったの？」

「小学4年生の男の子と仲良くなった

んですけど…。」

その男の子は元気で利発、人懐こく、なかなかの人気者。ある日、上に3人、下に1人の5人兄弟であることを教えてくれた時ことです。

「一番上のお兄ちゃんは今19歳で、先月結婚してん。」

「へえ！そしたら高校出てすぐに結婚したんや、すごいなあ！」

「え、お兄ちゃん高校行ってへんで。」

「えっ！」

「2番目のお兄ちゃんは、今年の春に中学卒業して、住み込みで働いてるねん」

「そ、そうなんや」

小学4年生の子どもが、兄2人が高校に行っていないことを、さも当たり前のように口にすることが、その学生にとってはあまりにも衝撃的だった事。さらには、

「…君はどうなん？高校、行こうと思う？」

「え？なんで行かなあかんの。行かへんわ。中学出たら、すぐ働く。お父ちゃんもお母ちゃんも、はよ働いて助けてって言うてるし…」

Cさんの頭の中には、授業で習った「子ども格差」「貧困の連鎖」「教育の格差」などと言う言葉がグルグル回り、あまりの常識の違いにクラクラしたそうです。

Cさんが私に言います。

「…なんで、あの子、高校進学する道を選ぼうと思わないんでしょうか。」

私はCさんに答えました。

「…じゃあ、なんであなた、高校進学しない道を選ぼうと思わなかったんかな。」

「え、高校に行くのは…当たり前じゃな

いですか」

「あの子にとって、高校行かないのが、当たり前なんじゃないのかな」

日々の仕事の中で、いわゆる「格差社会」と称されるものを感じる事が、本当に増えてきました。上記のようなエピソードは、今や日常的にあります。

親にお金を貸している、お金がないから行事に参加できない、勉強しても意味がないから進学すると言われて、友人が皆バイトで忙しいから、自分の忙しさも仕方がないと思っていた等、しょっちゅうお金がない、お金が欲しいという話をしている学生。

一方で、1000 円のランチを食べることに何の抵抗もない、深夜のクラブ通いでお金を散財する、高校を出た後は大学に進学するのが当たり前で、そうでない人がいる想像をしたことがない等、お金の話題をほとんど口にしない学生。

根底に「お金がない」という事を含んだ話は、様々なシビアな物事と関係しているように見えます。

格差社会とは

「格差社会」について、Wikipediaでは「収入や財産によって人間社会の構成員に階層化が生じ、階層間の遷移が困難である状態になっている社会」であり「社会問題の一つとされている」と書かれています。つまりここでいう格差とは収入や財産などの判り易い“経済的な指標”を使い、目に見える格差を指しています。

そして格差社会の問題は、教育のあり方の違いに密接に関連するとされています。

例えば2013年に成立した「子どもの貧困対策の推進に関する法」の第一条は以下の通りです。

「この法律は、子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、貧困の状況にある子どもが健やかに育成される環境を整備するとともに、教育の機会均等を図るため、子どもの貧困対策に関し、基本理念を定め、国等の責務を明らかにし、及び子どもの貧困対策の基本となる事項を定めることにより、子どもの貧困対策を総合的に推進することを目的とする」。

子どもの貧困対策と教育の機会均等がセットで考えられており、逆に言えば貧困であると教育機会が保障されづらいという前提で作られています。

一時期ニュースでよく取り上げられました。東京大学の学生の親に高所得者が多いというデータがあります。2012年の東大入学者の約60%の親の年収は950万円以上となっています。今や、高校や大学に進学するためには、塾や予備校に通うのは当たり前です。

このように、経済的な格差がそのまま教育の格差につながると考えられ、経済的な問題でそれらに通えない子どもたちに対し、今、全国各地で無料の勉強会の取り組みが設定されています。

そんなエピソードを聞いたたびに、「なるほど、確かに貧しいお家の子はやっぱり大変な人生を歩んでしまうよな」と私は漠然と感じていたのです。

しかし、ふと気が付きました。

もしも、子どもたちが経済的に同程度だとして、全く同じ教育を与えられた時に、全く同じ状況を生きることになるのでしょうか。

当然、そうはならないでしょう。同じような塾に行ける状況、理解ある親、経済的な余裕等々…があるから、皆一様に最高学府をめざす、などという志向が生まれるのかというと、それはどうにも考えにくいと思います。

だとすると、格差社会を説明する時に、東大入学者の世帯収入を指標とするのは、何だかおかしい気がするのです。

もしかすると、格差社会問題の文脈の中で語られる「教育格差」は、“偏差値”が上の方にいるかどうかという点でのみ、着目されているのではないのでしょうか。

経済的しんどさ≠人生のしんどさ

明るく元気で誰にでも上手にコミュニケーションが取れる男子学生。何か問題にぶち当たると、問題解決に向けて、楽しそうに策を練ります。

「何でそんなに楽しそうなの？」と聞くと、小さい頃、猿と猪しかいないような山あいの村で、仲間と駆けずり回って遊んだ時の事を教えてくれました。

「本気で貧しかったから、遊び道具なんてなくて、遊ぶっていうのは山中で走り回る事、っていう選択しかなかったんですよ。秘密基地作ったり、猿とケンカしたり…。でもおかげで、しんどいことや出来ない事っていうのは、自分を成長

させてくれる事だっていう事は身に染みて知っていますから。達成感っていうのがいいんですよー！」

と、笑います。

クラスの雰囲気陰悪になったり、問題が纏綿状態になった時、さっと前に立ち、論理的に状況を分析し、前向きになるように言葉をかけてくれる女子学生。自分の意見を主張する時、震え声で緊張していることが多く、自己を表現することを平気で出来るわけではないようです。

普段はとても無口で目立たない学生です。彼女は小中学校時代のいじめでかなり壮絶な体験をして、一時期は引きこもりも経験しましたが、その時期に読んだ本や定時制高校の先生の言葉、親のサポートでなんとか復活したとか…詳しくは聞いていませんが、「正しいと思う事は、怖くても言わないといけない」という事を、ある出来事から学んだと言っていました。

「親は勉強してもしやあない、はよ働け、って言うけど、私、やっぱりこの勉強がしたいです」

そう言った学生は、学内図書館にある関連図書はすべて読んでしまったとのことで、手持ちの関連図書を貸したら、これもあつという間に読んでしまいました。

卒業時は、無資格無経験でしたが、その分野に関係する就職をしました。何年かかけてお金を貯めて、通信制の大学に入学し、現在働きながら、より専門性を高めるための勉強を頑張っています。

地域のだんじり祭りに小さい頃から関わっている学生がいます。

「へんなおっちゃんや、とんでもない仲間もいるし、警察やらテキ屋やら、いろんな人とも関わって準備をして、毎年もう嫌や、しんどい！と思うけれど、終わった瞬間、また来年を楽しみにしてしまう」

とのこと。礼儀も、仕事の段取りも、お金の扱い方も、話し合い方も、遊び方も、全部ここで学んだと言います。

ここに挙げた学生、元学生は、経済的には様々な状況にありますが、多くは周囲に頼られていたり、一目置かれていたりします。社会人になってからも、それぞれ元気に働いている様子。

彼らが、共通して豊かに持っているものがあります。それは、生活環境と、それを活かす力です。彼らは、自然環境、土地の文化性、サポートしてくれる人たち、公共の社会資源、使える制度…これらを活用させて、なんとか困難状況を乗り越えてきています。

経済格差で判断すると ミエナクナルモノ

教育には、学校等教育機関において、偏差值的に表される「知的教育」だけではなく、家庭における教育や地域における教育もあるのです。これらの家庭教育や地域教育などは、知的教育と同じくらい、時にはそれ以上、その人の人生に大きく影響するように思います。

知的教育の習熟度を容易に判定するツールとして、偏差値があります。偏差値は、それそのものが学校教育の量や質を端的にあらわすものとして、社会に受け入れられています。つまり、説明に利用しやすく簡単に同意を得やすいものです。

知的教育とは別に、感情を処理する、理不尽な状況に対応する、責任を自ら引き受ける、知らない場所で自らのみを頼りに動く、誰かに協力をあおぐ、段取りをつける、話し合いをする、文化をつなぐ、礼をつくす…等のスキルがあります。これは社会で生きていくために必要なものです。

このスキルを習得して行くには、様々な人と交流し、達成感を味わったり、問題状況を打破するために考えたり、時には恥をかいたり、失敗したりして学んでいく事が必要になります。人格形成の主軸となるこの学びを仮に「社会関係教育」と呼ぶことにします。

社会関係教育には、個々の経済的な状況も影響を与えるでしょうが、それ以上に生活環境や誰かとの出会いの影響が大きいと思います。特に失敗した時、辛く苦い思いをした時、それを自分の人生にどう意味づけるかという事については、経済的な物よりもはるかに大きな影響があるでしょう。

ところが、そういった、社会関係教育において何をどの程度学び取ったかという事は、単純に数値化することが出来ません。また、何がどうなっていれば学

んだという事になるのかという基準も、非常に主観的なものです。つまり社会関係教育は、量や質を把握するにも表現するにも難しく、他者に説明しても同意を得難いものです。

知的教育と社会関係教育はどちらも教育であり、相互に関係するところもあります。

平川克美は、その著書の中で「統計学的な情報というものが有効に働くのは、統計学的な条件の内側だけであり、その外側では統計学的情報を使用すればするほど期待値とかけ離れた結果を生み出す」と書いています。また、「統計学的な数値に頼った分だけ、統計にできない重要なファクターを見落とす可能性が増大したという事である」^{注)}とも書いています。

格差社会問題を語る時、数値的、統計学的に把握が容易な偏差値で判断できる学校教育のみを見ているように思います。子どもを学校教育の文脈、つまり経済格差の文脈の中で理解し「格差があるからこういうもの」という結論に安易に結び付けてしまう。これにより、統計的に把握し難い、重要なファクターである社会関係教育として得られる、人間性や可能性の存在が見落とされるようにも思います。

教育の義務

国民の三大義務の一つに「教育を受けさせる義務」があります。

この義務は、保護者が我が子に義務教

育を受けさせ、高等教育を受けさせる学校教育だけを示すわけではありません。

もちろん、今の社会で豊かに生きていこうと思うと、学歴はどうしても重要視されますし、学校教育の機会は保障されるべきだと思います。高校や大学に進学したい子どものために、学校教育を受けるための支援は必要であると思います。

最近まで私は、「格差社会」「教育格差」という言葉は、格差の下の方にいる子どもや学生にとって、逃れられない枷のような言葉、しんどい人生を歩まねばならない烙印のような言葉だと思っていました。

しかし、この「格差」は経済状況の格差を、たかが経済格差だけを指す言葉です。確かに、経済状況は人生において大きなファクターになりえるでしょう。しかしその他にも、豊かな関係性、生活環境という大きなファクターがあるという事を忘れるところでした。知的教育の機会を保障する事と同じくらい、社会関係教育も大切なのです。

日常的な生活の上で関係する人々、環境、書物、メディア…これらから子どもが受ける影響、学び取り感じ取り思い知るという経験、これらを意識し、サポートする事がとても重要であると感じます。

さらには、個々の大人がその環境を形づくる存在であるという自覚。その自覚に基づき、例えば日常的に果たされる「交通ルールを守る」などの行動も、子ども達はもちろん他者への教育になる、つまり「教育の義務を果たしている」、という事だと思うのです。

Aさんがとった行動

イベント実行委員長のAさんは、委員会の皆を集めたい、と言ってきました。

「皆それぞれに事情があり、色んな人がいる。その中で、今後どのような委員会の進め方をすべきか」をテーマに話し合うそうです。

「先生、ちょっとサポートに入って下さい。無神経な事言ったり、やったりしちゃうかもしれないから。」

「了解っ！」

福祉系対人援助職を目指す学生にとって、日常的に自分ごととして感じる格差社会問題は、自分とは違う他者を慮る

力を養う重要なチャンスになります。また、慮るだけではなく、それをお互い口に出して話し合うことで、なおさら学生各々の見解を広げることが出来ます。そうすることが新たな問題を引き起こしたり、軋轢を生んだりすることもあります。学生は確実に成長します。

社会関係教育は、いわば日常生活全てが現場です。私たちに出来る事は、沢山あると思います。格差社会問題などという言葉に、学生の人生を押し込めないように心がけ、彼らの生活環境に多様に存在するモデルの1つでありたいと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
注) 平川克美『経済成長と言う病 退化に生きる、我ら』61 ページ 講談社現代新書 2009年4月